

エリみほ(仮)

ありやす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社会人のみほとエリカが同棲している日常の話です

ちょっとえっち要素が強いかも

基本一話完結にしたいです

pixivでも投稿しています。<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=128085>

エリミホ
エリミホ
(仮)
#3

目

10 4 1

次

エリみほ（仮）#1

今私は高校生の頃から密かに想いを寄せていた人と一緒に暮らしている。

「ねえ、みはどうしたの？今日のハンバーグ美味しくないの？」と不安そうに聞いてきたエリカさんに

「いや、違うんだよ。ただこうしてエリカさんと一緒に暮らすとは思つてもいなかつたから」

エリカさんは呆れた顔で「あのねえみほこの話何回目よ。私だつてみほと一緒に暮らせるとは思つてなかつたし、みほと一緒に暮らせて嬉しいわ」

私は何回聞いたか分からぬ返事を聞いて顔を朱くしてしまった。それを見たエリカさんは

「つたくしようがない子ねみほつたら」それを聞いてます顔を紅くしてしまった。

私だけ恥ずかしい思いをしたくないのでエリカさんに
「ところでエリカさん最近私とシテないから寂しんでしょ」

ギクツ、なんで分かるのよ、みほは確かに最近、みほとの営みが無く寂しい思いはしていたがそんなに分かりやすかつたかしら

そんな事を考えていたらみほが

「だつてエリカさん最近やたらと私にくつづいてくるじやん。そんなに寂しかつたの」

「それはみほが戦車道連盟の仕事で忙しそうにしてたからじやん」

確かにエリカさんの言う通り今年の全国大会の準備とかで忙しくてすることが出来なかつたし、今日はいっぱいシテあげよう
「じゃあエリカさん、ごはん食べ終わつたら一緒にお風呂入つてそれからできなかつた分しよう」

そんなこんなでごはんを食べ終え、エリカさんとお風呂に入つた。
やつぱりいつ見てもエリカさんの体は引き締まつているなあそんなことを考えているとエリカさんが

「何よ私の体そんなにおかしい」と不貞腐れながら言う

私は褒めるののように「そうじやないんだエリカさん。ただ、エリカさんの体が引き締っていてキレイだなって思つてただけだよ」

エリカさんは褒められたからなのか照れながら「そ、そうみほの方が整つていてキレイだけど」

エリカさんが楽しんで貰うためエリカさんに「ね、ねえエリカさんそ、その背中あ、洗つてもいい？」

エリカさんはすごく動搖していた。でもそんなエリカさんが可愛く思えた。

「べ、別にい、いいけど」とエリカさんは動搖しながらも言葉にして出してくれた。

「じゃ、じゃあいくよ。エリカさん」私はボディータオルではなく、自分の胸にボディーソープをつけ、エリカさんの背中に押し付けた。するとエリカさんは私が普通にして洗つていなることに気づいたのか。

「ちよ、みほあんたなんでボディータオル使わないのよ！」と驚いた声で言つてくれた。

悪戯な声で「だつてエリカさんが最近寂しがつてたからじやん」と言つて続けざまにエリカさんの胸に手を伸ばして揉むように洗つた。するとエリカさんが「ひあつ」と可愛らしい声を上げた。私はその声をまた聞きたいがためにエリカさんの秘部に片方の手を伸ばした。するとエリカさんは怒り半分嬉しさ半分な声で「ひあつちよつみほあんた後でベットに行つたとき覚えていなさい」とエリカさんは今日は私を寝かせてくれない事を宣言をしてくれた。私はそれを聞いて嬉しくなってしまった。なぜなら私も最近は寂しかつたから嬉しくなつた。

「へつくつしゅん」どうやらエリカさんの背中を流すのに時間を掛け過ぎたため湯冷めしてしまつた

「ちよつみほ大丈夫？」と心配してくれた。

私は「うん大丈夫、泡を洗い落として湯船に5分ぐらい浸かつてからお風呂を出ようよエリカさん」

エリカさんは「それもそうね、この後もベットでするから風邪を引

くと困るからね」

私たちはお風呂から上がり脱衣所で着替えると先に着替え終わつたエリカさんが「先に行つてベットで待つてるからねみほ」エリカさんはどんなことをしてくれるんだろうとワクワクしながら寝室に向かつた。

エリミホ（仮）#2

今日は休日だからといってお昼まで寝過ごすこともなく。

普段どうりの時間に起きた。エリカさんはまだ起きてくる気配はなかった。

昨日の夜は久しぶりだつたからエリカさん張り切つちゃて疲れたのかな？

私はベットから起き上がりエリカさんの可愛い寝顔を見てからキツチンに向かつた。

フライパンに火をかけ油とベーコンを敷きその上のに卵を落とした。エリカさんは黄身が半熟の目玉焼きが好きだから黄身に火が通り過ぎないように弱火で焼き、お皿に移した。続けて私の分の目玉焼きを作り、切り込みを入れたソーセージ焼きそれをお互いのお皿に盛り付け、お茶碗にごはんを盛つて、テーブルに並べた。

私はエリカさんを起こすために寝室に向かつた。寝室では、可愛い寝顔でエリカさんはまだ寝ていた。

この可愛い寝顔をもう少し見ていたいと思いながら「お寝坊エリカさん朝ですよ」

エリカさんは「う…うん」と唸りながら返事をした。それはエリカさんがまだ寝てたいという意思表示であつた。こうなつたら長期戦になると覚悟した。私は、エリカさんの体を揺すりながら「エリカさん朝ごはん冷めちゃうよ。ねえエリカさん」とエリカさんは目を擦りながら「う…ごはん…できたの？」寝ぼけながら言うエリカさんを起こすためのもうひと押しで「エリカさんの好きな半熟の目玉焼き焼いたから」とエリカさんは半熟の目玉焼きに食いついて完全に目を覚ましたのか、布団をガツと払いのけ「えつみほが焼いた目玉焼き！」と若干興奮気味に言ったエリカさんに「先に行つてよエリカさん」エリカさんは慌てて「ちょっとみほ待つてよ」と言いながら私の後をついてくるであつた。

「いただきます」と手を合わせて挨拶をして食べ始めた。私はある程度食べ進めたところで

「ねえエリカさん午後にケイさんが来るじやん、だから午前中に買い物に行きたいんだけどエリカさんも一緒に行く？」

「一緒にに行くに決まってるじやない。みほだけじやお菓子を多めに買つてくるじやない」とちよつと強めに言つてくるエリカさんに何も言い返せなかつた。事実私は、エリカさんと分けても食べきれない量買つてしまふからだ。

洗濯などの家事を終わらせて買い物バッグを持つてエリカさんと一緒にスーパーに向かつた。

スーパーに向かう途中エリカさんが「そう云えばみほ、今日は何を買うの？」

「今日のお昼のナポリタンの材料と夕飯の肉じゃかの材料と牛乳・卵・野菜を買おうと思うけど」

エリカさんは私を疑うように「本当にそれだけ本当はお菓子とか買いたいんでしょ」

ギクツ「なんでわかつたの」私はエリカさんに顔を近づけながら言つた。

エリカさんは呆れながら「なんでつて、みほがわかりやすすぎなのよ」

「私つてそんなにわかりやすいかなあ」「私つてそんなにわかりやすいかなあ」とエリカさんに謝つてしまつた。

ぐらいでわかりやすかつたわ」

それを聞いて「ごめんなさい」とエリカさんに謝つてしまつた。

またまた呆れた顔でエリカさんは「あのねえなんで謝るのよ別にみほのそこが嫌いな訳でも直せつて言つてる訳でもないし、むしろ、みほのそうゆうところが好きよ私は、もちろん戦車に乗つてる時のみほも同じぐらい好きよ私は」

私はエリカさんの言葉を聞いて嬉しくなり「エリカさん好きい」と言いながらエリカさんに抱きついてしまつた。

エリカさんは恥ずかしながら「ちよつみほ今だと、他の人が見てるから家に戻つてからにしなさい」

エリカさんの言葉で外にいることを思い出し今のこと周りの人

に見られてたと考えたら急に恥ずかしくなつてしまつた。

「ほら着いたわよスーパーよ」とエリカさんに言われ。

「えつあつうん」と変な返事をしてしまつた。

エリカさんとスーパーに入店し、お店の買い物用のカートを押しながら、今日のお昼ご飯と夕飯の材料と足りない野菜と牛乳と卵をカートに入れ、エリカさんに「ねえエリカさんお菓子買つてもいいお願ひ」とダメ元で頼んでみた。するとエリカさんは意外にも「いいわよ、ただし今日だけよ」

私は嬉しくなり「えついいの」とエリカさんに確認した。

「今日だけよ」と言ってくれたのでエリカさんを連れてお菓子売り場に向かつた。

「わあ～見てみてエリカさんボコのお菓子だよ。おまけで小さいボコが付いてくるんだって」興奮気味に言つてらエリカさんが「お菓子それにするの」私は悩んだ「ええ～どうしようボコにするか、エリカさんと二人で食べれるこのクッキーのどっちにしようかなあ」悩んでる私を隣で見ていたエリカさんは「ボコのお菓子買つてあげるからみほはクッキー買いなさいよ」それを聞いた私は「いいの！エリカさん」と目を輝かせながら言つた。「ほら早くクッキー、カゴに入れてレジに行くわよ」とエリカさんに言われるままレジに向かいお会計を済まし、家に戻りエリカさんに「エリカさんボコのお菓子買つてくれてありがとう」とエリカさんにお礼を言つた。

エリカさんは「いいわよ最近私もみほに構つてあげられなかつたから

私は嬉しくなり、「じゃあ飛びつきりおいしいナポリタンを作るねエリカさん」と張り切りエプロンを着た。

私がお昼を作つているとエリカさんはパソコンの電源を入れ日課のネットサーフィンを始めた。エリカさんに一度だけパソコンで何を見ているのかを聞いてみたことがあるけどエリカさんは教えてくれなかつた。

そんなことを考えていると千代美さんに教えて貰つた時短テクでパスタが茹で上がり、それをフライパンで作つたソースに絡ませて、

ケツチヤップで味の調整をして、お皿に盛り付けテーブルに並べ、エリカさんにお昼ご飯ができたことを伝えた。エリカさんはパソコンの電源を落とし、席に着いた。

「いただきます」と二人で挨拶をして食べ始めた。

「今日も美味しいわ」とエリカさんが褒めてくれて、嬉しくなりエリカさんに「おかわりはいっぱいあるかじやんじやん食べてねエリカさん」エリカさんは「じゃあそうさせてもらうわ」と美味しそうに私の作つたナポリタンを頬張るエリカさんを見ていた私はニヤけてしまつた。それに気づいたエリカさんは「何見てるのよ」不貞腐れながら言うエリカさんに「いやエリカさんいつも私の作つた料理美味しいそうに食べててくれるからつい」と言つたらエリカさんは照れてしまつた。

二人で黙々と食べ進めているとエリカさんが「こ、今度一人でりよ、旅行に出かけない?」と恥ずかしそうに言うエリカさんに「えつ旅行?」と頭に?マークが浮かび上がつたなんで、エリカさんはこんな中途半端な時期に旅行に行こうと提案したのだろう。そんなことを考えているとエリカさんが『なんでこんな時期なんだろう』つて考えたでしょまさか、みほ、あなた私たちが付き合い始めた日を忘れたんじゃないんでしようね』と私はエリカさんの言葉で思い出した。私の表情で察したのか呆れた顔で「みほつたら本当に忘れてたのまったくしようがない子ねえ」申し訳なさそうに「ごめんなさいエリカさんとの毎日が楽しくて、あつじやあ何かエリカさんに用意しないと」と謝ると、エリカさんは「いいわよ何も用意しなくて代わりにその日は私の傍に居なさい。あと一人だけの大変な日を忘れてたお仕置きをしないと」とエリカさんに言われ私は「はうう」と唸ることしかできなかつたし、エリカさんの言う『お仕置き』に少しワクワクした。

そんな話をしてると二人共ナポリタンを食べ終わり、私が洗い物を済ませるとソファード横になつてエリカさんが「ねえみほ『お仕置き』するからこつち来て」と私を呼んだ。

私がソファーまで来るとエリカさんは両腕を伸ばしてきた。私はそれに応えるようにして、エリカさんに跨り、私も両手を伸ばしハグ

をし、エリカさんにされるがままの状態でキスをした。お互いの唇が重なり、お互いの舌が絡み合う「くちゅくちゅ」といやらしい音を立てながらお互いの唾液を交換し合い二分くらいはキスをしたと思う。「つぶつはあ」と言いながらお互いの唇は離れた。「みほのは甘い味がするのね」と興奮しながらエリカさんが言う。私も「エリカさんのも甘い味がしたよ」

「きやつ」と小さな悲鳴を上げたなぜなら一瞬にして私とエリカさんの場所が変わったからだ。エリカさんが『何が起こった』って思ったでしょ」とエリカさんが優しくそして色っぽく問い合わせる。私はそんな風にエリカさんが聞いてくるから顔を赤くしてしまった。エリカさんは私のズボンの中に手を入れ、下着の上から私の秘部を優しく撫でるようにして触っている。「あつあん」と声を抑えながら喘ぐとエリカさんが意地悪そうに「私が『いい』って言うまではいつちやダメだから」と言いどんどん指使いが激しくなる。私はエリカさんに抵抗せずに受け入れた。エリカさんは私の弱点を的確に攻めてくれる。「みほ、まだイッちやダメだから」とさつきより興奮した声で言うエリカさんの言うことが守れそうになく私はエリカさんに「あつん もつもうダメだよエリカさん私イキそうだからイカせて」とお願ひするとエリカさんが「いいわよみほイッていいわよ」と言われ私は腰をヒクヒクさせながら盛大にイッてしまつた。段々と理性を取り戻してきた私はエリカさんに「もおエリカさんは『ごめんみほこんなにショビショになつちやたじyan』エリカさんは「ごめんみほこんなに派手にイクとは思わなかつたは、下着とズボンは責任を持つて私が洗濯するから」と軽く謝つた。私はエリカさんにキスをするフリをして、起き上がりエリカさんを押し倒し、エリカさんの秘部に手を当てようとした瞬間、玄関に続くドアの方から「ワーオー！ミホ達ったらお昼から元気なのね」私たちは声の主を確認するためドアの方を向いた。そこに居たのは大家さんのケイさんだつた。エリカさんは驚きを隠せない様子でケイさんに「な、な、なんでここにケイさんが居るんですか？」と質問するエリカさんの問い合わせに対してケイさんは「なんでつてそりやあ月に一回の住人の悩みを聞く日だからよ」エリカさん

はまだ疑問があるようでそれをケイさんに「でも、なんで部屋に入つてこれたのですか?」と質問するとケイさんが「玄関の鍵がかかってなかつたし、もしミホたちが居なくて、変な人が入つてきいたら困るじやん。あとちなみにエリカが『みほイツていいわよ』あたりから聞いてたから」とケイさんが言つたのを聞いて私達は顔を真っ赤にしてしまつた。エリカさんが私の方を向き「じやあ玄関の鍵をかけ忘れたみほが悪いじゃないの!」と強めに言うエリカさんに「荷物を持つてた私の代わりにエリカさんが鍵をかけてくれるんだと思つて」と言い合いを始めるとケイさんが仲裁に入つてくれた。

私たち3人は席に着いた。ケイさんは私たちに「なにか最近この部屋を使つててなにか困つたことはない?」と聞き私たちは顔を合わせ「特ないです」と答えた。「それは良かつたわ。あと、一ヶ月後に隣の部屋に新たに家族が越してくるからよろしくね」と言い席を立つた。「じゃあまた今度 see you」と言い残し去つてしまつた。

私はエリカさんに「今度隣に越してくる家族つてどんな人たちなんだろうね」エリカさんは「さあ案外私たちの知り合いだつたりして」「まさかそんなことないと思うよエリカさん。…ねえエリカさんさつきの続きする?」と、エリカさんに聞くとエリカさんは頷いたので私はエリカさんの手を引き寝室に連れて行つた。

エリみほ（仮）#3

「ねえエリカさん明日お互いに仕事が休みだから映画観ようよ」と私に聞いてくるみほに「別にいいけど映画なんて何で観るのよ」と聞くとみほは「テレビでも見れるネットのサイトと契約したから」と呑気に言うみほに「ちよつみほなんで私に言わずに契約しちやうの」と少し強めに言うとみほは申し訳なさそうに「ごめんなさいエリカさん」だつてCMで最初の一ヶ月は無料つてやつてたからつい」と言うみほに「今度から気をつけるのよ。それで何を観るの」とみほに聞くと「体が入れ替わる高校生の映画」と答えるみほに驚いた。なぜなら普段のみほなら、ボコの映画しか観ないのにどうゆうことだろうか。そんなことを考えながら冷蔵庫に向かった。みほに何を飲むのか聞くと「お酒」と返つてきたので私は「だめよみほ、みほがお酒飲むとこつちが大変なんだから」と言うとみほは「ええーじゃあオレンジジュース」と言うので冷蔵庫からみほの分のオレンジジュースのボトルと自分の分のビール缶を出し、戸棚からみほの方に向かうとどうやら準備が整つたようで「エリカさん早く」とみほに急かされた。私はみほの隣に座り、机にジユースなどを置きみほのコップにオレンジジュースを注いであげた。みほが私だけビールなのに気づき「エリカさんだけズルい」不貞腐れながら言うみほに私は「私はみほと違つてビール二本だけで酔わないからいいのよ」と言つた。するとみほが「じゃあ今度エリカさんがオススメするアルコール度数が低いお酒飲ませてよ」と言うみほに「じゃあまた今度ね」と返した。

みほが部屋の電気を消してやつと映画を観始めた。最初の方はみほと一緒に話しながら観ていたが、映画が進むにつれお互い黙つて観ていた。映画もエンディングに差し掛かつたところでみほの様子を確認するとみほが泣いていた。やっぱりみほはこの手の作品は泣いちゃうのかしら？私にはイマイチ刺さらないと考えているとみほが「どうしたの？エリカさん私のこと見つめてるけど顔に何か付いてるの？」と急に聞かれ驚き私は慌てて「えっ、あ、てゆうか、みほ

あなた泣いてるわよ氣づいてないの?」と聞くとどうやらみほは泣いていることに今気づき自分の手を頬に当て「あつ本当だ観てているうちに泣いちやつたのかな?」と笑いながら言うみほに、私は「あんたつて昔からそうゆうのに弱いわよね」と言うとみほは「えへへえ」と照れるみほが愛おしく思えた。

そんなことを考えているとみほが私に「ねえエリカさんはどう思つた?」と聞かれ私は「どうつて、やつぱりわからないことが多すぎたわ」と言うとみほが「確かにわからないことが多かつたけど、お互のこと好きだつたんだと思うよ」と言うみほに「そーねえ」と冷めたふうに言うとみほが「もおエリカさんは恋愛映画とか興味ないんでしょう」と頬を膨らませながら言うみほに「そようよ他人の恋愛なんて興味ないわ。だつて今一番興味が湧くのはあなただけだもの」と言うとみほが顔をますます赤くしながら「もおエリカさん酔つちやつたですか」と言うみほに「何言つてるの私がたかがたビール一本と半分で酔う訳ないじやない」と言うと不貞腐れながら「酔つてる人はそう言つんです」と私は「はいはいそうですね私は酔つてますよ」と言うとみほが「ほらあやつぱり酔つてるじやないんですか」と言うみほに私は違和感を感じた。なぜなら普段なら私がお酒を飲んでも何ともないのに今日は違う。みほに「今日のみほ何かおかしいわよ」と言うとみほが間違えて私の飲みかけのビールを飲んでしまった。どうやら映画の途中にも間違えて私の飲みかけを飲んでしまつたらしい。私は慌ててみほに「ちよつみほ、あんた、それ私の飲みかけのビール」と言うとみほはどんどんと顔を赤らめてしまつた。終いには呂律が回れず私に「あつ本当にやーりえエリカひやんのビールら」とおぼつかない足取りで私の方に寄り、抱きついてきた。「ねえエリカひやん、ちゅうして」と私にねだつてきた。だからみほにはお酒は飲ませたくなかつたのにと思ひながらも私は「わかつたわ一回だけよ」と渋々了承した。するとがみほが私の口に舌を強引にねじ込んできた。そしてみほの舌は私の舌を逃がそうとしてくれなかつた。そんな強引なディープキスに満足したのかみほは私の口から舌を抜いてくれた。私は「ちよつみほ今のは強引すぎ」と言うと、「らつれえエリカひやん

らつれえいつも激しめりやん」と、もはや私でもわかりづらい程までに酔が回っていたので私はみほにお姫様抱っこして「私が連れて行って上がるからもう寝るわよ」と言うとみほが「エリカひやんは変態ひやんなんられ、らつてこうらつてわらひを襲おうとしてるんれしょ」と言いまほの言葉を否定しながら暴れるみほを抑えながらどうにか寝室に向かった。

どうにかみほをベットに横にさせた。するとみほが「ねえエリカひやんおいれ」と両腕を伸ばしながら私に言った。私は「はいはい」と頷きながら横になつた。結局みほはなんである映画を選んだらうか？それに本当だつたら疲れて眠いはずなのに何故か今日はみほが私を寝かせないでくれるのだろうと期待した。